

---

## 海外旅行記～オーストラリア編～

### マイ・フェイバリット・シングス～プロローグ

Bright copper kettles and warm woolen mittens.

Brown paper packages tied up with strings.

These are a few of my favorite things.

和訳すると、「金ピカのやかんに、ほかほかウールの手袋。リボンで結んだプレゼント入りの茶色の小箱。これが私のお気に入り。」これは、映画『サウンド・オブ・ミュージック』のワンシーンです。

家庭教師として派遣された修道女マリアが、子供たちと意気投合する場面で、雷が怖いとマリアの部屋に入ってきた子供たちを、悲しい時はひたすら、お気に入りを思い出せば大丈夫よ、なんて歌って励まします。

ナチスドイツ時代を生き抜いたオーストリアのトラップ・ファミリーの物語で、ドレミの歌とかエーデルワイスなどの名曲を世に送り出しました。この、マイ・フェイバリット・シングスもジャズのスタンダードナンバーとして有名ですが、お代官様もバドミントン以外の、お気に入りをこのコーナーで囁いてみたいと思います。

ラグビー、ウォンバット、旅行、サギタリウス・・・などなど、思いつくままにマニアックに綴りたいと思いますので、興味の無い部門には進入しないで下さい。



### セカチュー～エアーズロック旅行1994

セカチューと言えば、社会現象にもなった長澤まさみの映画「世界の中心で愛をさけぶ」ですが、全く内容を知らなかったお代官様は、自分の最も元気だった頃から判断すれば、世界の中心は、香川県高松市で、栗林公園か屋島山上辺りで愛をさけぶのか・・・と納得。残念ながら、隣町の庵治町が舞台でしたが、石の町庵治の魅力満載で主人公のアキとサクと共に瀬戸内海がキラキラ輝いていましたね。



けれどアキが入院した病院は松山で、お見舞いに電車で行くのが大変だったろうし、十年以上前なら高松空港は、香南町の新空港じゃなくて、雨・霧で欠航が相次いだ現在サンメッセ香川のある林町の旧空港だったはず・などとツッコミを入れましたが、アキが憧れた世界の中心はオーストラリアのウルル・エアーズロックでしたね。



ここは現地のアボリジニーの聖なる土地。広大な赤土の大地にポツコリ浮かぶ一枚岩。鎖の手摺り伝いにアウトバックの見渡せる標高348mの山頂へ。日の出、日の入りは、時間の経過と共に太陽の光を浴びて色彩を変化させます。ほんとに、エアーズロック以外は何もない「世界の中心」と言うにふさわしい場所です。



最後に、庵治町は平成の大合併(18年1月10日)で高松市に編入されました。故に、高松が世界の中心で正解。

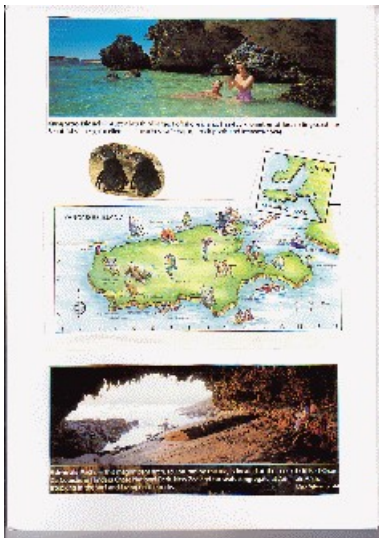
ハイ・・・さめき高松芸どころ、どの町通ってもツンチツンツン、ねんごげに踊っておいでまいよ、ほんどり踊っておいでませ♪



## カンガルー島～アデレード旅行1996

アシカとアザラシの違いは？

アシカは前脚が発達していて鳥が羽ばたくようにして泳ぎ、アザラシは後脚が発達していて魚みたいに泳ぎます。耳を比較すれば、アシカには耳たぶがあってアザラシには無く小さな穴があいているだけ・・・って誰か、こやつらの耳の穴に息吹きかけたことあるんか～い！東京の多摩川に出没したタマちゃんや、徳島的那賀川ナカちゃんは、アゴヒゲアザラシという種類で耳たぶが無いようです。

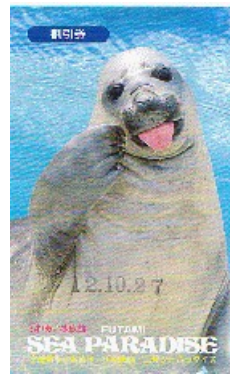


てなわけで、耳たぶを捜しにオーストラリア・アデレード沖のカンガルー島のシール・ベイ保護区へ。ここは、野生のアシカを間近に見られる世界で唯一の海岸です。海岸での注意事項は、アシカが寄ってくるのを待ち、手の届くところまで近づいても騒がず触らず。(また、耳に息も吹きかけず。)レンジャー同行での見学、しかもこのルールが徹底しているせいか、見ている間にも海から上陸して、可愛い顔で間近に迫ってきます。



御影石が波風に侵食されてできた巨岩リマーカブル・ロックスに荒波に削られたアーチ型の岩アドミラルズ・アーチ。野生のカンガルー、エミュー、コアラ、オットセイ。

地形、生き物まとめて、ここは「自然の宝庫」と言うにふさわしい島でした。アシカの耳たぶを発見したかどうかは・・・写真で判断してみましょう。あしからず。



## 西海岸～パース旅行2000

### 1、バンドウイルカ

イルカはお魚？それとも哺乳類？サメはどっち？

哺乳類は母乳で子育てして、魚類は卵を産む？

陸上の動物だったら明らかですが、海で生活するイルカやサメが赤ちゃんに母乳飲ます場面、思い浮かびますか？

答えは、尾びれに注目。尾びれが上下に動くのが哺乳類で、左右に動くのが魚類です。ゆえにイルカは哺乳類、サメは魚類です。



そんな野生のイルカに会いたくて、パースから北へ840kmセスナに乗ってモンキーマイアまでお出かけしました。ここは、世界遺産にも登録されたエリアで、浅瀬にバンドウイルカがやってくるスポットです。

歴史を辿ると40年ほど前に地元の漁師が、ボートから投げ捨てる魚を目当てにイルカがついて来たことから始まり、生態の研究のための施設を建設し、その後、観光のための施設を追加して現在に至っているそうです。



ここでは、一日に数回、専門のレンジャーが、やって来るイルカたちに餌を与えます。餌付けではなく、共生(interaction)という考えで、彼らが一日で必要とする餌の3分の1を与えます。但し付近の海域に住むすべてのイルカが来るのではなく、特定の数パーティーだけで、親に付いてきた子供が～そしてその子供が～という世襲制度的な一族が来ているそうです。私たち観光客は、こうしてやって来る彼らを静かに見守るのです。彼らは、口笛や歯ぎしりみたいな音を使ってコミュニケーションを行い、定期的に群れたり、バラバラに行動したりを繰り返す(fission/fusion society)人間的な生き物です。太陽の光を浴びて、浅瀬で横腹を見せてキラキラと輝き、愛嬌のある表情で、人間に近付いてくる姿を見ているだけで、幸福な気分になれますよ。

モンキーマイア…もう一度行ってみたい天国のような場所です。



## 2、荒野の墓標ピナクルズ

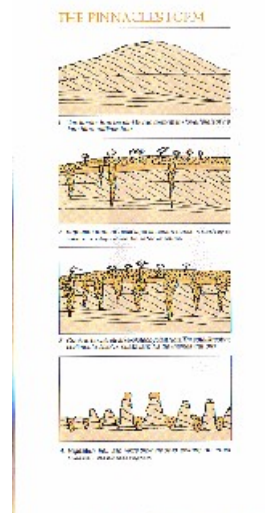


岩の正体は「石灰岩層で原生林の根元にたまった砂が、時間と共に固まり、やがて地表の風化・浸食によって出現したもの」というのが、ガイドブックに書かれてあったメカニズムですが、オーストラリアの大地と言えば、エアーズロックに代表される鉄分の多い赤土。こちらナンブング国立公園のピナクルズ砂漠は黄色の大地に黄色のとんがり帽子。近づけば、気泡が多く見られ、貝の化石らしき

ものが含まれるものもあり、確かに元々は海の中に存在した地層(石灰岩層)であったことがわかります。



ガイドさんの説明によれば、と言っても英語中心でよくわからなかったのですが、イマジネーション (imagination)という言葉を繰り返していました。すなわち「ピナクルズは、天候や見る角度、見る者の気分によって多様なものに見えるから、それぞれの想像力を膨らませてください。」てな感じですかね。



まるで装甲車みたいな4WDの車でパースから北へ250km。途中、動物園でコアラを見て、ダートの道をまっしぐら、西オーストラリアで最も有名な花・ワイルドフラワーや口を開けるとブルーの舌の可愛い顔したトカゲにも遭遇。最後は白砂のビーチを車で走行。インド洋の海岸線に沿ってのドライブで充実の一日を過ごしました。オーストラリアの大自然に乾杯！

Reptile(爬虫類)はお好きですか？タイ・バンコクの暁の寺院では、大きなニシキヘビを首に巻いて写真を撮影できますが、誰が金払ってそんな事するんや！（写真は1992年）



そう、お代官様はヘビが大キライです。あのニョロニョロとした姿でクネクネと地を這い、とぐろを巻いて、鎌首持ち上げ、チョロチョロと舌を出すんやで。あの冷徹な目で睨み付けられたら『ゲコ！お母ちゃん、堪忍・・・』と言って逃げ出してしまいます。

けれど同じ爬虫類でも、トカゲは平気。特にオーストラリアの愛嬌のあるものは、可愛いって思います。威嚇手段として、エリを広げて後ろ足で走り回るエリマキトカゲ、短い足でヨチヨチ歩くマツカサトカゲ。バラックストリート桟橋から渡し船でスワン川を越えて行くパース動物園の呼び物は、爬虫類展示館。少し暗いスペースの中、スポットライトを浴びて自由に動き回るReptileは一見の価値あり。しっかり生態が観察できますよ。



当然、園内ではカンガルーに触れたり、コアラに会えたりもできますが、ここでしか飼育されていない珍獣ナンバット(西オーストラリア州のパース付近にしか生息していない絶滅が危惧されていて、蟻を主食とする小型の有袋類)の顔だけは、何度行っても見ることはできません。今度はいつ訪問できるかわかりませんが、必ず“Try it again!”したいと思っています。



## カモノハシ～メルボルン旅行2002

「ICOCAで行こか！」なんてキャッチコピーで有名になったカモノハシ・・・



今でこそ認知されていますが、哺乳類なのに卵を産む変り種で、オーストラリア固有の生き物です。単孔目、カルガモみたいなクチバシがあって、お乳は腹部の皮膚から分泌。普段は淡水の池の巣穴の中で生活し、人前に出るのを嫌う恥ずかしがり屋さんです。英語ではPlatypus(プラティパス)

同じ単孔目でもハリモグラなどは、天王寺動物園の夜行性動物コーナーでゴソゴソと歩き回っているのに、カモノハシだけはオーストラリアでしか見られないレアものです。



初めてオーストラリア旅行した時の一日だけの自由行動は、こやつを見るためにタロンガ動物園を訪問。当時飼育している所は、こことメルボルン動物園だけで、滞在時間中何度も水槽を覗きましたが、泳ぐ姿は拝見できず・・・

係員を捕まえて身振り手振りで、いつになったら出てくるか聞くと、巣穴に隠れていてお腹がすいたら出てきて泳ぐみたいで・・・その頃の英語力ではその程度しか理解できませんでしたが、最後に言われた言葉は、

“Try it again!”・・・わかりやすいものでした。



それから10年・・・2002年の旅は、メルボルン・シドニー。

テーマは「カモノハシに会いたい！」

メルボルンは最初のオーストラリアの首都で、南半球で初めてオリンピックが開催された都市でもあり、市内はトラムが走り、京都のように基盤の目に整備された美しい街です。

ヨーロッパ風の建築にF1レースのコースがあって、ガーデンステイツと呼ばれるヴィクトリア州らしく



緑に恵まれて、南に足を伸ばせば十二使徒の海岸のあるグレートオーシャンロードに、フェアリーペンギンの上陸するフィリップアイランドなどなど。



けれどもメインの訪問先は、カモノハシの居る動物園。今度はメルボルンで、“Try it again!” 入場券を買って真っ先に向かった先はプラティパス。薄暗い水槽を覗けば・・・ やっぱ何も居ない、誰も居ない。

園内を散策し、再度プラティパスコーナーに行くと、茶色の棒が浮かんでいて、今度はそれが水の中を動きまわる。苦節10年・・・“Try it again!”の結果が目の前に！

「あなたに会えて、本当に良かった。嬉しくてうれしくて、言葉にできない♪」

なんて、普段軟弱だとか言って非難していたはずのオフコースのフレーズを思わず口ずさんでしまいました。

やっと会えたカモノハシは意外に大きな茶色の物体。そして、カルガモみたいなクチバシを上下に揺らして、水かきのある手足で泳ぐ姿を一生懸命眺めていました。これにて目標達成。



また、メルボルン滞在期間のもう一つの感動は、野生のポッサムに出会えた事・・・というより、選んだホテルが「ヒルトン・オン・ザ・パーク」で、夕食後フィッツロイ公園を歩いて帰ると夜行性のポッサムがゾロゾロと出没してつぶらな瞳で、我々を見つめます。あんまり良くはないと思いますが、つい夜食のつもりで買ったフルーツを与えてしまいました。

「もっと食わせてくで〜！」なんて感じでまわりついてくると可愛いけど、さすがに周りを囲まれると怖くなりますね。



そして、今回のもう一つの訪問先はシドニー。お気に入りのスポットでもあるダーリングハーバーへ。目的は“Try it again!”・・・

シドニー水族館でもカモノハシを飼育し始めたと聞いたので「エントリーじゃあ～！」

入場したそこは、Platypus World！生態を展示したコーナーの奥には、フラッシュ撮影OKの水槽とメルボルンのそれより小型のカモノハシが泳ぎまわる・・・「あなたに会えて、本当に・・・って、またまたオフコースか～い！」と自らボケて自ら突っ込んでしまいました。

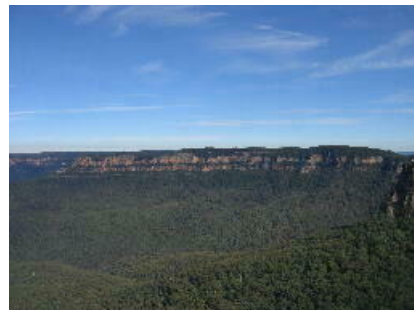
うむ、余は満足じゃ。



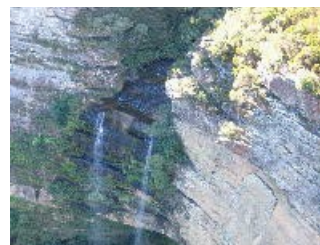
不思議の国・オーストラリアの不思議な動物・カモノハシ・・・一見の価値ありの逸品です。

### ブルーマウンテンズ～シドニー旅行2005

ブルーマウンテンズ言うても珈琲ちゃいませ！シドニーから内陸部に入った所にあるカトゥンバ国立公園。名前の由来は、ユーカリの木々から発せられる油分に太陽の光があたって、プリズム作用を起こし周辺の山々が青く見える事だそうです。



確かに遠景を眺めると森林の緑と所々に見える岩肌から、青い霞(かすみ)が煙ります。見所は展望台エコーポイントから見る、3対の巨岩が並んでそびえ立つスリーシスターズに、落差の大きな滝カトゥンバ・ホールズ。バスツアーでは、慌ただしく写真撮影して終わるだけのこの地へは、リュックを背負って列車に乗って出かけましょう。



セントラル駅からカトウンバ駅まで2時間、バスに乗り換えて、エコーポイントへ。(時刻表も整備され、思ったより簡単に移動できます)スリーシスターズからジャイアント・ステアウエイなる急勾配の階段を降りて、ハイキング。ユーカリの森の香り、周辺を流れる水の音、鳥の声を聞きながら、おいしい空気を胸一杯吸い込んで歩き回れば、気分は上々。すれ違う人には、「ハイ！」とか「グッダイ！」なんて言いながらオーギー気分で大自然を満喫。急勾配のレールウェイや、周辺を展望するロープウェイに乗ったりもできるし、ゆっくり観光してみたいスポットです。



また、同じ路線上のブラックタウン駅で下車すれば、フェザーデイル野生動物園で、ユーカリの木に、たわわに成るコアラが拝めます。癒し系の可愛い動物が好きな人には、二重丸オススメのスポットです。

### クオッカ～パース旅行2006

平成18年のゴールデンウィークの旅行は、世界で一番美しい街、西オーストラリアのパースに出かけました。今回のテーマは、「クオッカの居るロットネスト島でリゾート」です。



オーストラリアの動物と言えば、コアラ、カンガルーに代表される有袋類に哺乳類でありながら卵を産むカモノハシあたりがメジャーですが、骨まで噛み砕く強力な歯を持つタスマニアデビルや、つぶらな瞳のポッサムに、豆タンクのように駆け抜けるウォンバット、長い舌で蟻を食べるナンバットにハリモグラと個性派揃いですが、パース沖に位置するロットネスト島には、島固有の夜行性の小さな有袋類、小型のカンガルー、クオッカが生息しています。50センチ程度の背丈で、ネズミみたいな小さな顔して、ぴよんぴよん飛ぶ姿が可愛くて、こやつに会いたくて、この島に渡ってきました。



島の名前も、初めて上陸した人が、この動物をネズミと勘違いして、ネズミの巣すなわち、ラット(Rat)のネスト(Nest)の島という意味で「ロットネスト島」と呼んだそうです。この島は周囲40km程度で、海の青、自然の緑、砂浜の白と自然に囲まれていて、島内の交通手段は、観光専用のバス以外は自転車のみで、夕刻になると、あっちこちからクオッカが出没し、一面の草をむしゃむしゃと食べ始めます。今回、宿泊したロットネストロッジの庭にも、囲いがしてあるにもかかわらず、クオッカだらけ。真夜中に目覚めて、扉を開けて外を覗くと、草を食べ続けていました。

朝になれば、たくさんの丸っこくて小さな黒い排泄物を残して、居なくなったのですが、この島の凄いところは、翌朝になれば、この排泄物を片付ける専門部隊が出動して、次の観光客の来場に備えるのです。さすが、自然とクオッカが、観光資源のこの島ですね。

また夜空は、南十字星はもとより、プラネタリウムもびっくりの星降る天空。天国みたいな場所で、昼はリゾート、夜はクオッカと天体観測・・・なんて生活したら幸せなんでしょうね。



### パンドラの箱～ゴールドコースト旅行2007

初めてオーストラリアに上陸したのが1992年。フレンドリーなオージーに、可愛い動物たち、自然の宝庫のこの大陸に惚れ込んだのは、最初のイメージが良かったからで、今回の旅行のテーマの一つは、原点回帰。

初めて踏んだ地、クイーンズランドのゴールドコーストの良さを再発見することで、パンドラの箱を開けるような気分で旅してみました。



### エンタテインメント

イルカや海の動物がいっぱいのシーワールド。ワーナー映画のムービーワールド。ドリームワールド

ドは遊園地で、アドレナリンパークなるドキドキ体験遊戯施設に蠟人形のワックスランド、コアラだらけの動物園ローンパイン・コアラサンクチュアリーとテーマパークが並んでいます。



今回の訪問先は、シーワールド。天高く飛ぶイルカのショーに、コメディタッチのアシカのショー。極めつけは1960年代テイストの水上スキーショーで、踊るゴールドレディーに、ポマードでオールバックに髪を固めた不良少年と、ポニーテールの少女たちが、モーターボートに引かれて水上を舞い踊るミュージカル仕立てのエンタテインメント。言葉がわからなくても、存分に楽しませてもらいました。

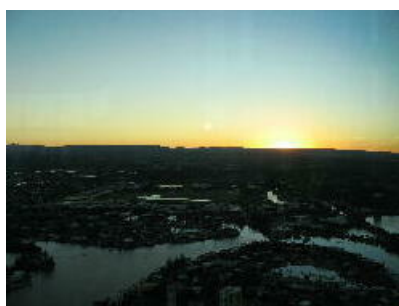


## サイト

シーワールドの観覧車から眺める市内の風景には感動。キラキラ輝く青い海、抜けるような青い空に、見えなくなるまで続く真っ白な砂浜。程よくそびえるリゾートホテルやコンドミニアムなどの高層建築。



また、最近のオススメスポットは、世界で一番高い住居でもある80階建てのランドマーク「Q1リゾート&スパ」の展望台。エレベーターでここに昇るだけで17.5オーストラリアドル(日本円で換算すれば1800円くらい)もかかりますが、この金額を支払う価値ありの最高の眺望です。日の入り前に昇って、世界の海岸を眺め、沈む夕日を眺めれば、リッチな気分で一日を終われます。



## アクト

行動の中心は、サーファーズパラダイス。海岸に降りれば、永遠に続く白い砂。泳ぐ人、くつろぐ人、眠る人、サーフィンに乗る人。陸に上がれば、ショッピングセンターにレストラン。ここでは、それぞれの思いを乗せたパラダイスな時間を手にすることができます。



## イースト

ゴールドコーストから南へ車で1時間半。ニューサウスウェールズ州に入れば、大陸の最東端パイロンベイに到着です。バスターミナルから東へ、これまた美しい白砂の海岸に沿って歩き、ウォーキングトレイルコースを登れば、最東端の岬の突端、南太平洋を一望できる高台から真っ白な灯台に到達します。



汗を流して、高台でさわやかな風にあたれば、気分は上々、海を眺めると、荒波の中を泳ぐ野生のイルカの群れ。文字どおり大自然を体感できました。



また、このバイロン岬では、6月から10月の間に、南極から、お産や子育てのためにやってくる野生のクジラが観察できるそうです。背中の通気口から、潮を吹き、真っ白なお腹を見せて伸び上がる姿を目にできたら、もっと大きな感動があるのでは・・と想像してしまいますね。



## レイテスト

ローンパインのコアラに、シーワールドの水上スキーショーに、サーファーズパラダイス。15年の時を越えて、再びパンドラの箱を開けてみた結果は、当時は当時なりの素晴らしさ、現在は現在の素晴らしさを兼ね備えています。

この地ゴールドコーストは、日々進化し続ける魅力に満ちあふれた最新(レイテスト)のパンドラの箱。私たち旅行者にとっての天国・・すなわち、トラベラーズパラダイスではないでしょうか。



Back  
[戻る](#)